◆ 平成 20 年度（後期）県立広島大学 学部・学科・研究科（専攻）等による FD 活動（教育改善）報告一覧

実施主体	コーディネーター	日・時	実施場所	実　施　目　的　・　実　施　内　容
人間文化学部 健康科学科	学科長：三浦　朗 学科 FD 委員： 岩本　珠美 菅原　芳明	①9 月 1 5 日～10 月 15 日	特に定めない	テーマ： 1)　実施目的（対象組織として実施する理由等） 学科における「教育改善」を目的として，2008 年度前期「学生による授業評価」に対する担当教員コメントの集計結果について，学科教員全員で共有化すると共に，平成 20 年度「第 3 回学科ＦＤ研修会」とする。学科全教員が参加して行なうものである。（11 名から出された意見感想については次のとおりであった。） **＜2008 年後期第 1 回（通年では第 3 回）FD 報告書＞** **Ａさん** 多くの先生方は素晴らしい授業をなさっているようですね。羨ましい限りです。 僕としては，平均を目指していたのが，幾つかの項目で平均以下であった。これに一喜一憂することはもう止めにして，最善と思われる自分にあった方法でやるしかないと思い直した。わからない者は仕方がない，自分で調べ，考えるしかないと思ってもらうようにしたい。別途，自分なりに授業に関するアンケート行い，クラスのどの程度が理解にについてどうなのかを，大筋で掴めるようにしたい。それを授業に生かすようにしたい。試みに，これについてはこの前期に行ったのでそれを参考にして行いたい。 **Ｂさん** 今回，学科各先生の「授業評価」へのコメントを読み，ご担当の授業に対する教員としての心の悩みは深く，その悩みは増すばかり・・・との現状認識を共有出来たと考えています。と同時に，学科全体の視点で眺めて見ますと，不思議な事に，学科全体（総体）としては大きなポテンシャルも感じますし，ある種“すがすがしさ”を伴った躍動感すら感じました。そう感じたのは，私だけでしょうか？ 最近，授業改善に関わる大学主導の講習会は多々。その多くでは，講師諸先生の「成功体験」に根ざした貴重なお話をお聞きする一方，最終的な結論は何方もご一緒で，『現今の授業の現場における，「改革」・「改変」・「変革」の重要性の強調！！』。このことも念頭に入れ，今回，「授業評価」コメント集を読まさせてもらいました。で実は，私，ほっとしました。 今，「競争社会」の美名の下，学生個々は個々別々に分断される傾向にありますし，その一方，教える側も，勤務評価の導入等を含む教員個々別々の管理の強化により分断の方向にあるように思います（少なくとも，私は，そんな危機感を昨今募らせています）。 今回の「授業評価」コメント集から明らかなことですが，個々の教員の悩みは深い・・・。その「悩み」の重みは，一人の教員が背負うには，余りにも荷が重すぎる程にもなりつつある。ただし，これはこれで不思議な事でもあると思うのですが，今回のレポートがいみじくも指し示しているように，科全体でそれら教員個々の努力を寄せ集めて，学科の”総体“として眺めますと，上記のように学科そもそもが持つ，「ポテンシャル」の大きさを感じますし，ある種“すがすがしさ”を伴った「躍動感」すら感じます。

				つまり，授業現場での「変革」が“躍動感”を生むのではなく，授業現場における「教員個々の悩み・もがき・苦しみ」ならびにそれらを基礎・基盤とした学科総体としてのエネルギーこそが，授業現場にある種の“躍動感”を与える。今回，そんな風に感じた次第です。教員個々がバラバラに分断されて居ては，かかる「エネルギー」は決して生じない！！ Cさん 学生による授業評価は，授業の改善には大変役に立つものであるが， ① 大学はこの評価で，教師自身が改善できる点と大学がしなければいけない点を十分検討する必要がある。毎年同じような調査をしても，大学の改善にもならないし，大学の主役である学生のためにもならない。 ② 平均とグループ平均を出して比較することが，意味がないことを，大学はどうしてわからないのか不思議である。ある事象を無理やり数字にして，考えるのは，危険である。 ③ 健康科学科は，人数が少ないので，あまり問題はないが，授業のレベルを高くして，優秀な学生にあわせて講義をすべきか，その逆がいいのか問題である。数字だけ気にすると後者のほうがいいのか。 Dさん 今回，私は，極端に皆様方の足を引っ張る方向（特に１年生対象の授業科目）への”寄与“をしておりまして，言わば反省文といいますか，それに対する自分の想いを記すことにします。 １年生をご担当のその他の先生方の評価を見ますと，私の結果が，特段に今年度の１年生という集団特性のみに起因したものとも思えず，正直，途方にくれている，というのが心情です。 全体（少なくも，私の１年生への当該授業をのぞけば）としては，本学科の先生方のご尽力はたいへんいい方向へ向かっているようで，なによりと感じます。ただ，個人としては，いまのような学生の反応ですと，あと 10 年余りも，ここで教育に携わっていく自信がない（迷惑をかけるは申し訳ない）というのが正直な感想です・・・・。 Eさん 全般的に健康科学科の授業を概観すると学生の満足度が高く，適切な授業を行っているのではないかと思います。 個々の授業のコメントを読みますと，0.01 ポイントでも高くしなければ・・・という意気込みが感じられる反面，数値が絶対視され，空しく感じられます。学生の評価は，１から５までの絶対評価であり，それの平均値を出し，グループ平均と比べどうであるという相対的なコメントの出し方やその公表の仕方に違和感を持ちます。FD 自体は必要なことだと思いますが，よいところを見つけ，認め，次の授業に発展させられるようなシステムになることを望みます。 Fさん 健康科学科の各先生方のコメントを読ませていただきました。昨年度もそうでしたが，各先生が授業に対して，一生懸命に取り組まれている様子がとても具体的に記述されており，ご苦労が伝わります。そのことによって，私も，さらに授業改善に努めるモチベーションを高めていけるように思います。学習の目標レベルをどこに設定するか？については，２ー３年前から，苦労し

				ています。「難しすぎる」「ついていけない」といわれると，つい，難しいグラフをスライドからはずす，あるいは取り扱う教材のレベルを下げてしまいそうですが，内容が高校の教科書のレベルなってしまいます。もっと詳しく（メカニズムといったこと）知りたい学生には，「退屈な授業」になってしまいます。これは，授業をする上での，教員に課された，普遍的な命題かも知れません。教員コメントの共有化を積み重ねていくことはとてもいいことだと思います。授業のテクニックに関する情報を得るという意味ではなく，授業改善へのモチベーションを維持するために，少なくとも私にとって，とても意義があります。これこそ FD 研修だと思います。 Gさん 　感想を送付いたします。深く考えていないようなコメントですみません。 教員のコメントをみると，授業評価の数値だけでは判断できないところもあり，コメントと併せてみていくことが必要であることがよくわかりました。 　教員コメントから担当していない学年の様子や他の授業での学生の様子がわかり，参考になります。また，先生方の授業での工夫や取り組み方は，自分の講義の反省ともなり，担当教員コメント集計結果の学科内への公表・共有化は有意義だと思いました。 Hさん 　以下，コメントです。 　健康科学科の学生は，学科開講科目に対して各科目終了時におおむね満足していることが伺える。しかし，各科目は点ではなく 4 年間の線として存在しているため，各科目終了時の学生の評価を正当な評価として受け入れるべきかどうかについて疑問が残る。具体的には基礎科目で「難易度が高い」と評価されてる傾向があるが，関連応用科目の履修後（4 年次）には，基礎科目で履修した内容を理解しようと努力し，十分に消化している様子が伺え，基礎科目の「難易度を下げる」必要かあるのかは検討の余地があると考えられる。今後の授業評価が，4 年次の学び全体を把握できる評価体制となることを望んでいる。 Ｉさん 　「学生の意欲を引き出すための工夫をしなければならない」という改善点を報告されている授業科目が多く見られること，「高校での授業へ近づける必要がある」と考えられた授業科目が見られたこと，「理解し易いような資料や工夫をしなければならない」と考えられた授業科目がみられたこと，等など，これら全てが学生の質の変化なのか，入学までのシステムによるものなのか，定かではないが，次年度に向けて学科教員全体の問題として捉える必要があると思う。自分自身の授業科目においても，今年度から受け持った授業なので今年度しか結果は判らないが，確かに学生の理解や意欲を引き出すために，工夫を要したと実感している。 Ｊさん 健康科学科の FD 研修で昨年度後期の授業評価結果に対する教員コメントを学生にフィードバックし，双方に授業評価の持つ意味を共有できたと認識している。その時に学生側からは授業評価アンケートを軽く受け止めていたことによる反省もあったし，改善に努力している教員に対し，授業評価は大事なのだという意識が芽生えていたように思う。そこで，今回の授業評価をみると，

				2，３年生とそういう認識のない１年生の間に大きな意識の違いや世代の違いがあるように感じます。２，３年生に対しては，改善が評価され，今後もその授業改善の枠のなかで対処できるように思う。だが，１年生には授業改善の域を超えた，学生意識の差という大きな壁を感じ，今後どのように対処していくのかという難題に取り組まなくてはいけないのかと危惧している。杞憂に終わるといいのですが，しばらくは静観してみるつもりです。 Kさん 今回，学科 FD 委員からの要請の趣旨とは多少異なるかもしれません。過去４か年間続けて来た私の FD（授業改善）の顛末を，以下，記したいと思います。 今現在との視点で，私自身の過去 20 年間の「授業」（の在り方）を振り返り見ますと（最近まで実はまったく気が付かなかったのですが），極め尽きの「悪弊」がある（いや，あった）・・・。それは，「授業の“クライマックス”の部分が，いつも授業の終盤にやって来る」・・・と言うことでした。 悪弊？つまり，授業でもっとも強調すべき「部分」が，いつも，なぜか終業のチャイムとほとんど同時になる（鳴る）。チャイムが鳴り出すと，チャイムの音に合わせたように（血中への）アドレナリン分泌量が増える（これって，条件反射？）。そのため，チャイムと同時に，『君達～，ここが大切！！』，『ここが，ここの章の本質！！』と“絶唱”・・・。 このような「悪弊」に気付いたのは，上記のようにまったく最近のこと。本学の統合の 1～2 年前，多分，学生達の気質の変化がその背景（根底）にあるのだろうとは思うのですが・・・。この頃になって始めて，私の“絶唱”に，誰も耳を貸さないことに気付き出したのです。学生達は，終業のチャイムと同時に，椅子から腰を浮かす，目は（黒板ではなく）ドアの方を一斉に向く！！当然と言えば当然の「事」なのですが，“従前”の風景に慣れ親しんだ我が身には，極めて“つらい”光景に映りました。1～2 年このような状況が続き，当然，授業担当者としては悩み，葛藤し，そして，それらの様々な葛藤を経て・・・気付いたことは（気付かされたことは），『これまでは，学生達の”寛容さ“に支えられて，その結果として，私の授業が成立して来た』と言う厳然たる事実でした。 平成 17 年，新大学の発足と同時に１年のチューターとなり，かつまた「フレツシュマンセミナー」を担当することに・・・。上記のことが（根底に）在ったものですから，「フレツシュマンセミナー」には，いつも，ストップウオッチ持参で出かけた（もっとも，持っていくことを忘れることも，多々）。私が計測した限り・・・と言うことではありますが，丁度 60 分で授業を終えたのはK先生お一人。後の方々はすべて多かれ少なかれ 60 分オーバー。（『お前はどうか？』との声が聞こえてきそうですので）記して置きますと，私の場合は，オーバーもオーバー，大オーバー！！授業を終えて，役目柄，出欠の点呼を取り終えた丁度その時，終業のチャイム！！ K先生がご担当された「フレツシュマンセミナー」の 1～2 週間後だったと思うのですが，そのK先生と電車の中で・・・ばったり。そこで，K先生に，『授業や講演を時間通りにぴったり終えるには，何か，コツがあるんですか？』と率直にお聞きしてみました。K先生のご返事。『コツねえ～。コツはないよ。ないね～。なぜか分からないけど，30 分と言われたら 30 分，60 分と言われたら 60 分，90 分，120 分と言われたら，その丁度の時間に終わっているねえ～！！』と。そのお話をお聞きした直後から，私の，「時間内に授業を終える」とのチャレンジが始まった次第です・・・。チャレンジを開始したのは・・・良い・・・のですが，最初の１年は，「時

				間」を意識しすぎたためか（今の心境で振り返れば），以前より，授業時間をオアーバーすることが多々，かつオーバーする時間の長さも・・・半端でなくなりました。つまり，惨憺たる「結末」に。そのような惨憺たる結果に愕然としながらも，2 年目，心新たに再チャレンジ・・・。結果は，1 年目とほぼ同様！！さすがに･･･滅入りました。3 年目，引っ込みがつかないので･･･，今年もやって見るか・・・！！その 3 年目ですが，なぜか，時間をオーバーしても，1～2 分で済むようになりました。さすがの学生達も，１～２分は許容の範囲内らしく，クラスの多くが私の話に耳を傾けてくれるように・・・。そして，４年目の今年，なぜか理由はまったく分からないのですが，K先生のように，“ぴたり”と授業を終えることができるようになりました。少なくとも，今年度の私の「授業」における授業時間の超過は「皆無」。そしてその結果，これもなぜかまったく分からないのですが，いつも，授業の終盤に来ていたはずの「“あの”クライマックス」が分散するように・・・。「クライマックス」が，授業の前半部に来たり，真ん中にあったり・・・。実に，不可思議な感じがします（まあ，当然と言えば，当然なのでしょうが)。そのような不可思議さの中で，K先生のお言葉が浮かびます :『コツねえ～。コツはないよ。ないね～。なぜか分からないけど，30 分と言われたら 30 分，60 分と言われたら 60 分・・・』。私の場合は，「90 分限定」，かつ，慣れ親しんだ私の「授業」のみ。「のみ」・・・ではありますが，実に４か年の歳月が・・・・。K先生，感謝，感謝，感謝！！
		②1 月 24 日（土） 9：00～17：00	広島キャンパス 大講義室	1) 実施目的（対象組織として実施する理由等） 学科における「教育改善」を目的として，2009 年 1 月 24 日（土）開催の「平成 20 年度健康科学科卒論発表会」を学科 FD 研修の場と位置づけ，参加者の意識調査を実施した。今年度の「卒論発表会」は，学科が推進する「広島大学・歯学部との連携事業（教育・研究・地域貢献に関するもの)」の一環としての位置付けもあり，広島大学・歯学部の教員・学生の参加を得て初めての卒論研究成果発表の場ともなった。広大・歯学部との連携事業の意味や意義を測る上でも必要不可欠な FD として実施したものである。 2) 実施内容 平成 20（2008）年度健康科学科「卒論発表会」が，2009 年 1 月 24 日（土）9：00～大講義室にて開催された。今年度は，特に，学科が推進する「広島大学・歯学部との連携事業（教育・研究・地域貢献に関するもの)」の一環との位置付けもあり，広島大学・歯学部の教員・学生の参加を得ての初めての卒論研究成果の発表の場となった。 「卒論発表」は， 4 年生一人一人にとり，本学における 4 年間の勉学の集大成であり，かつまた各研究室での一年間の研鑽（卒論研究）の成果発表の「場」・・・でもある。一方，当学科では，平成 7 年の学科開設以来，『学科を構成する学生・教員が共に参加する「会」では，学生・教員共に，（何らかの形で，また何らかの意味で）「健康」や「健康を科学する」ことについて考える，また，学生は，「学生自身の“将来”について思いをはせる」こと，教員は「学科の“将来”について思いをはせる」こと』を学科のポリシーとして来た。「卒論発表会」の場は，このような意味における「学科 FD（研修)」の格好の場・・・でもある。 以下は，そのような趣旨（「2008 年度健康科学科第 4 回ＦＤ研修会」）に基づいて，会当日に実施した参加者アンケート調査の集計結果（「第 4 回ＦＤ研修会報告書」）である。回収ボックスに回収されたアンケートの総枚数は 81。以下はその「まとめ」である。 ――――――――――――――――――――――――――――――― Ｑ１：『健康科学科の「卒論発表会」は，（伝統的に）会の段取り，準備，運営，進行の一切を４

				年生の卒論発表会委員（今回は石川・中村・堀本・松村の４名）を中心にした学生による自主運営としています。このようなやり方について，ご意見をお寄せください。』 １．すばらしい，実に良いやり方だと思う。　34 名（42%） ２．納得できる。　45　（56%） ３．学科が，もう少し積極的に介入すべき。　2　（ 3%） ４．学生（の手）に委ねないで，学科主導で実施した方が良い。　0 Ｑ２：『健康科学科では，（伝統的に），学科を構成する学生・教員が共に参加するこのような会では，（何らかの形で，また何らかの意味で）「健康」や「健康を科学する」ことについて考えることとして来ました。今回の卒論発表会では，「健康」や「健康を科学する」ことについて，考える良いきっかけになりましたか？』 １．「健康」や「健康を科学する」ことについて，深く考えるきっかけになった。　43 名（53%） ２．良いきっかけになったとは思う。　35　（43%） ３．まあ，それほどでもなかった。　3　（ 4%） ４．きっかけにすらならなかった。　0 Ｑ３：『健康科学科では，（このような会では），（学生は）「学生自身の“将来”について思いをはせる」，一方（教員は）「学科の“将来”について思いをはせる」として来ました。今回の卒論発表会は，各々，“将来”に思いをはせる良いきっかけになりましたか？』 １．“思いをはせる”良いきっかけになった。　72 名（89%） ２．まあ，それほどでもなかった。　8　（10%） ３．きっかけにはならなかった。　0 （白 1名） Ｑ４：『今回の卒論発表会に参加しての（率直な）感想，（忌憚のない）ご意見，さらには次回に向けた提案等がありましたなら，（一言でも結構ですから）以下の自由記載欄にご意見をお寄せください。』 ・広島大学との連携については，学生主体の卒論発表会という観点から，その在り方を検討する必要がある。「司会が一番権限を有する」等，会の運営については，ある程度のレクチャーが必要かもしれない。長時間の会は，やや苦しい。2 回に分ける，あるいは分科会に分ける等の工夫が必要ではないかと感じた。 ・資料の作り方，発表の仕方など勉強になりました。私も，先輩たちのように，来年の（卒論）発表会に向けて頑張りたいと思います。 ・とても素晴しい会だったと思います。 ・先輩達の発表がどれもすばらしかったので，来年自分ができるのかどうか不安です。 ・発表の時間が決まっているので仕方がないと思うのですが，早口の発表は，聞いていて理解するのが難しかった。特に専門的な内容はわかりづらかった。

				・ はじめから質問する（質問者の）人数を限定しておいたほうが良かった。4 年生の先輩が，いろんな質問にもちゃんと答えていてすごいと思った。でも早口すぎてよくわからないところがあった。 ・ 皆さん，本当にすばらしい発表で，努力してきたことが伺えました。 ・ 「一人 8 分」は短いように感じました。説明が早く聞き取れない箇所がありました。先輩方が簡潔に発表されているのを見て，良い勉強ができました。 ・ 立派な発表が多く，来年自分がこのような発表ができるのかが心配。 ・ 1 人当たりの発表時間が短く，早口であることが多かったです。忙しい（この）時期には難しいかもしれないが，発表会を 2 日間に分けて，実験方法などもゆっくり説明できるようになれば，発表の内容も理解しやすくなるかもしれません。 ・ 私は，広島大学・歯学部・口腔保健学科の学生です。県立広島大学の健康科学科の皆様が，様々な視点で研究されているので，私達も頑張っていきたいと思いました。私達の学科は，口腔健康科学科に名称変更するので，同じ健康科学の専門家として，研究を互いに続けていけたらいいなと思いました。 ・ 1 年後，この場で今日の先輩方のように発表していると思うと信じられない。これからすごく頑張らなきゃいけないなと思いました。 ・ 先輩方がしっかりしていて，とても格好よく見えました。来年の私たちもあのようになれるのか・・・，少々不安になりました。 ・ 歯学部口腔保健との連携で，今後もこのような形でやるのであれば，先方に最初から最後まですべて参加いただくのは，余りに長すぎるので，なにか方策を考える必要があると感じた（例：なんらかの方法で全体のプログラムの構成を恣意的に考えるなど）。プレゼンの仕方も含めて，卒業研究（教育）であると捉えているので，今回の，多くの学生の発表：パワーポイント垂れ流しの中での原稿の棒読み，にはちょっとショックを受けた（以前は，もっと，各先生方が鍛えて下さって，ポインターで示しながらの発表がほとんどであったと記憶します）。来年からは，せめてお茶とお菓子，くらいは用意する（笑）。 ・ 一年後に自分もやるのかと思うと気合が入りました。卒論の研究テーマはほんとうにいろいろあるんだなあと思いました。自分が何をしようか・・考えるきっかけになりそうです。 ・ 難しい質問も発表者のみなさんは的確に答えていて，素晴しいと思いました。進行もスムーズでよかったです。 ・ 健康の 2 年生です。先輩方の研究発表を聞いて，これからますます勉強に真剣に取り組まなければいけないと思いました。 ・ たくさんの分野の教授の方がいらっしゃって，多方面から，研究発表について質問や意見が聞けたことや情報が共有できたことが良かったです。先輩方の答えの適切さや答え方がきちんとされていたことにびっくりしました。 ・ 先輩方が，はきはきと自分の研究を発表しておられて，とてもすばらしいと思いました。私も，これからがんばろうという意欲がわいてきました。 ・ 発表の内容によっては，伝える内容の量が多く，早口すぎてよくわからないうちに先に進んでしまう発表がいくつかあったので，その点の工夫が必要であると思った。 ・ 質問も基本的なものから難しいものまで，多彩なものだったので，事前に多く学習しておかなければならないと感じました。

				・ レジュメ（抄録）が足りないようでした。これは，2-3 年生および広大の方々の出席が多くあったので仕方がないことでした。ただ，次回からは，院生にも配布するようにしたらどうでしょうか。前半は広大の先生の質問に圧倒され，学生からの質問は出ませんでしたが，後半は積極的に学生さんが質問して良かったと思っております。全てを発表すると，聞く方はかなり前知識がないとついて行けない状況になります。学生のことを考えれば，全てやったことを発表するのではなく，説明を少し多くして，もう少し絞って発表するのも一つのやり方ではあるかも知れません。先生方にこれだけやりましたという事であれば，それはそれで良いとは思いますが。 ・ 司会の人は発表タイトルを言ってくれた方が良かったと思う。 ・ 司会の人はもう少し時間管理をしっかりしてほしかった。見ていて，面倒くさそうに感じていい気分ではなかった（午前中）。誰が何について発表するのか，司会が，タイトルを言った方がよいと思う。 ・ 準備，運営，進行おつかれ様でした。みんなの研究内容，すごくおもしろく聞くことができました。 ・ おつかれさまです。4 年生の席が端で見にくく，ちょっと疲れました。 ・ お疲れさまでした。抄録（レジュメ）は大学院の院生方にも事前に配布してほしいとの声がありました。 ・ 委員の皆様，ほんとうにお疲れ様でした。 ・ 小休憩がもうちょっと（多めに）あればよかったなと思いました。 ・ もっと学生（特に 3 年生）が質問すべきではと思いました。 ・ 発表は全てすごいと思いましたが，自分には，とてもできないと思い，かなり不安になりました。あと，参加されている方々からの質問が「そんなとこまで聞くの？」というようなことが多くて，怖かったです。 ・ 最初の方，質問時間が長かったと思います。 ・ 学生による会の運営に賛成！ ・ 他の大学の学生が，どのような研究をしているのかということを知れて，とても良い経験になりました。ぜひ，（県立広島大学と広島大学の交流を）これからも続けてほしいと思います。 ・ 広島大学の先生方に圧倒されて，学生が質問できなかった。また，午後から退席される点について，説明がなかったので，午後発表の 4 年生のモチベーションが下がったかも知れない。一方で，午後は，本学科の教員や学生（特に 4 年生）が質問できる雰囲気となったのはよかったのかも知れない。広島大学との連携をより深めて，よい交流の場となることを願っています。 ・ 客観的な視野で，物事を検証するという科学的な思考を養うのに，卒論研究は大変有意義であると再認識しました。また，従来の学生主導の質問のみと異なり，他大学教員による質の高い質問があり，様々な側面から研究内容を検討することができたように思います。 ・ Ｑ１に関して，学生の自主運営ですが，その陰に教員の指導助言があることを忘れてもらっては困ります。とてもよい教育の場であると思います。 ・ 4 年生が段取り～進行をおこなっている点や，発表の仕方，内容など，4 年生最後の総まとめにふさわしいものだったと思います。広大の歯学部の先生方や学生さんが参加すること

				・ 大講義室は，部屋自体は広いが席の１つ１つが狭くて，8 時間座っているのは辛かった･･･。 ・ がんばりました。 ・ 漠然としていた「卒論研究」の実体が感じることができ，参加してとても有意義な時間を得ることができました。プレゼンの仕方，どんな質問がされるのかといったことも分かってきて，自分の発表の際の参考にしたいと思いました。内容については，少し難しく，勉強不足を痛感しました。 ・ 休憩があまりなくて残念でした。特に午前中。 ・ 1 年間の成果を発表できて，よい機会となりました。 ・ 「健康」「食」「生体」というキーワードとは連関を保ちつつ，大変多様な研究テーマが網羅されている点がすばらしかった。この良き伝統を今後も維持進展させていただきたい。会の進め方について，とくに問題は感じませんでした。ただ，ノンストップぎみだったので，中休みをあと 1～2 回設けて頂いた方が聴衆にとっては楽かなと思います。時間の制約があり，難しいかもしれませんが・・・。 ・ 前半は進行が遅く，質問と質問の間がはっきりせず，ムダな時間があったような気がします。後半はピンマイクを次演者に早めにつけるなど，うまく回せていたようです。どうしても時間がおしてしまうような卒論発表のような場では，臨機応変に対応ができるよう，柔軟な思考，能力が必要になってくるように思います。今後に生かしていただければと思います。 ・ いろんな分野に関する発表が聞けてよかったです。ただ，長く感じる点，時間の都合で質疑応答に時間を取れない点，などを考えると，いくつかのグループに分けた発表会でもよいのではと思いました。他のグループについては，レジュメをいただく or 日程をずらしての聴講もありではないかと感じました。グループが小さくなり，分野が近くなればより多くの意見交換ができるのではないかと思うのです。 ・ 「アブストラクト（要旨）について」: 配布されたのが，発表会の前日であったが，もう少し早く配布してほしい。１週間前には，配布するように，申し合わせがあったのでは？目次に，ページ番号がない。タイムスケジュールが付されていない。提供すべき情報に不備があると感じた。これらについて，学科（担当教員？）から担当学生に対する指導（チェック）が必要。「発表会について」: タイムスケジュールを全員に周知し，それに沿った運営に努める。広大からの参加もあり，活発な議論を伴う発表会になったことは評価できる。4 年生全員が最後まで熱心に参加したことは，すばらしいと思った。 ・ 今回の「卒論発表会」は，“初物“のオンパレード・・・でした。県立広島大学・健康科学科と言う枠組みにおいての“初めて“の卒論発表会，大講義室を使用との前提（「器」が大きくなるだけで（小さい場合に比べ），会の進行等が格段に大変！！）での “初めて“の卒論発表会，また，休日の一日を丸々つぶしてのかつ学科構成員全員参加型での“初めて“の卒論発表会，さらには，広島大学・歯学部との「教育・研究・地域貢献」に係わる連携の模索（4 年生に取っては，きっとその内容や実体を測りかねる･･･そのような）の中での“初めて“の卒論発表会，当然，広島大学･歯学部の教員･学生参加した中での“初めて“の卒論発表会･･･。このような“初もの“づくしの中での「卒論発表会」・・・でした。その中で，主役の 4 年生

				達は，ほんとうに「よくやった！！」と，「私」は，思います。「会」が終わろうとする今，午前中のことを振り返りますと，ハプニングの連続・・・で，「私」は，（正直）肝を冷やしました。「会」が始まった直後は，心配で，心配で・・・居ても立っても居られないそんな“感じ“でした。今日は，これから一体どうなる？今日の「卒論発表会」ほんとうに大丈夫？ただ，そんな心配も「時間」の経過と共に，“杞憂“に・・・。「私」の“肝“が落ち着き出した最大の要因は，発表者個々の実にどうどうとした質疑応答振り・・・。それらの質疑応答振りに，4 年生としての「矜持」を見た気がしました。午後の部では，「会」の司会・進行も，午前中の“戸惑い“を完全に払拭（脱却），適切かつ見事な司会・進行・・・振りに変わったのは明らか。今日一日が終わるに当たって，「すばらしい！！」の一言を 4 年生の皆に贈りたいと思いました。4 年間の「成長」を“実感“する・・・(「思いも掛けず（ハプニング！！)」・・・）そんな一日になりました。
保健福祉学部 看 護 学 科 ・ 教育課程検討会	松森　直美	①10 月 7 日(火) 16：20～17：50 ②11 月 17 日(月) 14：40～16：10 ③12 月 24 日(水) 10：40～12：10 ④平成 21 年 1 月 20 日(火) 17：00～18：00 2 月，3 月未定 (各 1 回実施予定)	3416 教室	○テーマ　（看護学科の教育課程における実践的教授法の見直しと再構築） 学生の看護実践能力を強化するための教育課程の精選を行うと同時に教員の指導力の向上を図る目的で，各看護領域における専門科目の教授内容の中でも特に看護倫理に焦点を当てて検討を行った。9 月 29 日に講師(山口先生)による看護倫理研修会を実施した。 基礎看護学，成人看護学，老年看護学，精神看護学，母性看護学，地域看護学，小児看護学の各領域の代表者が，それぞれの科目における看護倫理の教授内容を報告し，意見交換を行った。また，メンバー以外の教員にも共通理解できるように，看護倫理に関する教授内容の一覧表を作成した。さらに，看護倫理に関する文献を購入しメンバー間で検討を行った後に，看護学科教員全員に配布する文献を購入する予定である。 今後，学生への看護倫理に関する意識調査を実施すること，現在の教授内容をさらに学生にわかりやすく看護倫理を意識できるように取り入れていく工夫を行うこと，実習へ結びつけていくことなどが明確となった。次年度は，看護倫理に関する意識調査を再度行い，今回の調査と比較して評価を行っていく予定である。
保健福祉学部 理学療法学科	清水ミシェル・ アイズマン 学科長	①平成 21 年 1 月 23 日(金) 12:00～13:00 （臨床実習指導者会議終了後） ② 毎週水曜日学科会議内 9:00～10:30 ③ 毎月第 2 水曜日学科会議前 （都合により変更有り）	① 2313 教室 ②③ 2416 会議室	○テーマ ① コミュニケーションを図ることができない学生に対する指導方針等について ②学生支援に関する検討会 ③学科勉強会 内容 ① 臨床実習中にコミュニケーションを図ることができない学生に対する指導方針等について討議し，情報の共有化を図った。 ② 支援が必要な学生の対応策を学科教員で検討した。 ③ 学科教員による勉強会の開催。開催 1 週間前にテーマ，担当者について学部内全教員にメールを送り，学科以外の教員の参加も募っている。その内容は教育から最新の研究テーマ，抄読会と多岐にわたる。
保健福祉学部	近藤　　敏		2416 会議室	○テーマ　（作業療法士教育における FD 研修 2 ）

作業療法学科	田端　幸枝	①7 月 23 日 ②平成21年3月25日(水) 12：30～13：30(予定)		1 目的 作業療法学科教員の FD 活動に対する理解を増し，重要性の認識をより深める。そして，本活動により教員間の教育に関する情報の共有化を推進，教育の質の組織的向上を図る。 2 内容（キーワード：情報の共有化，教育の質の組織的向上，丁寧な学生指導） (1)　情報の共有（学生に関する情報，作業療法教育に関する情報，等） (2)　教育の質の組織的向上（学科としての FD 活動，等） (3)　丁寧な学生指導 1：初年次教育（学生の生徒化への対策，等） (4)　丁寧な学生指導 2：国家試験対策（不合格者への指導，受験者への指導，等）
保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	吉畑　博代	①9 月 28 日（日） （東京国際フォーラム） ②平成21年2月21日(土) （川崎医療福祉大学）	1309 演習室各教員研究室など	○テーマ　（講義の質の向上，教員の心の健康の維持） 1 目的 本学科では，ST カリキュラムに沿った講義内容を行う必要があり，また本学附属診療センターを用いた学内実習を実施しているため，ST 独自の工夫が求められている。学生の学力の低下や社会的マナーの欠如などが指摘されている昨今，講義の質の向上を図るとともに，学生指導に携わる教員の心の健康を守ることも重要である。 2 概要 日本言語聴覚士養成校教員連絡協議会研修会（「導入教育の試み」など）参加，チューターによる学生への面接，学内・学外実習指導など 3 内容 ①東京国際フォーラムにて行われた日本言語聴覚士養成校教員連絡協議会第８回研修会に，本学科教員３名が参加した。その後，学科内のクリニック会議にて，概要の説明を実施した。 ②川崎医療福祉大学で行われる日本言語聴覚士養成校教員連絡協議会第１回中国四国ブロック研修会に，本学科教員４名が参加する。 ③その他，チューターによる学生への面接と，必要に応じて個別指導を実施した。またコミュ学科 3 年次生の学外実習（10 月～11 月）中には，教員が分担し，実習施設訪問を行った。
保健福祉学部 人間福祉学科	三原　博光	①12 月 5 日（金） ②12 月 6 日（土） ③平成21年3月13日(金)	①三原キャンパス ②三原キャンパス ③「喜望の家」	○テーマ　（地域の障害者家族を支援する学習能力の構築） 1 目的 社会福祉においては，理論は非常に重要であるが，同時に社会福祉実践能力は重要である。福祉実践によって，福祉対象者の生活は改善され，社会全体への改革につながって行くからである。そこで，学生と教員がそのような福祉実践能力を構築することを目的とした活動を計画した。 2 内容（３つ以内のキーワード：地域福祉，障害者家族，学習能力） ①12 月 5 日（金）は，大阪の西成区の釜が埼でアルコール依存症のホームレスの支援をされている秋山仁先生を招き「ホームレスに対する支援―実践的取組を中心に－」という講演会を開き，学生・教員も含めて約 100 名が参加した。 ②12 月 6 日に三原市で障害者福祉研修会が障害者の親を中心に実施された。そのなかで，4 月に人間福祉学科学生が中心に，三原市の地域の障害者とその家族を対象に実施した「障害者家族とのビーチバレーボール・食事交流会」の実践報告を学生が行った。 ③平成 21 年 3 月 13 日には，人間福祉学科 3 年生 10 名が，大阪の西成区の釜が埼でアルコール依存症のホームレスを支援している「喜望の家」を訪問，見学する計画を立てている。